

---

# 夢の樂園 S S

壬宇羅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢の楽園SS

### 【Nコード】

N5779M

### 【作者名】

壬宇羅

### 【あらすじ】

日々の退屈が嫌で、日常から飛び出した少年。  
荻野抗治「オギノ コウジ」と

謎の家出少女。

林童恵奈「リンドウ エナ」  
の出会いから始まった。

夢の楽園SS「ショートストーリー」

なぜ、ショートストーリーなのかは、今は秘密と言っ事で。

## 萩野コウジ編 序章1（前書き）

読みやすさを考慮して、編集しました。

週一くらいで更新できればなと思います。

## 萩野コウジ編 序章1

春夏秋冬、365日、毎日毎日変わらない日常。

そんな毎日に虫酸がはしる。

高校最後の年。

それがなんだって言うんだ？

確かに、今年で高校生活は最後かもしれない。

しかし、卒業すればまた、進学するにせよ、就職するにせよ、その先に待つのは、何も変わりばえの無い平凡な日々だ。

それが一番なんだよ、と大人は言う。

俺にはそれが理解できなかった。

いや、理解しようとも思わない。そんなのは、妥協が産んだ産物であると俺は言い捨てれる自信があった。

毎日毎日、面白みの無い日常を過すだけなんて、そんな人生はごめんだった。

？

気付くと学校には、もう何週間も行っていない？

別に学校がいやかじゃない。ただ、刺激の無い今の生活にうんざりだった。

昼下がり、俺はいく宛も無く、やる事も無く、ぶらぶらと街を彷徨っていた。

家にももう、数日は帰っていない。

街路樹の脇に置かれていたベンチに座り、ぼうつと、遠くを眺めていた。

突然目の前を誰かが横切る。

セーラー服を着ているその少女は、下を向きトボトボと歩いていた。

時計を見ると、時間はまだ、二時に差し掛かったあたりで、下校の時間と言いつ訳では無い。

特にそれ以上は気にする事も無く、俺はベンチに横になる。

ん？

落し物か。

どうやらそれは手帳のようで……学生手帳か……………。

「はあ」

溜息を吐き手帳を拾いに行く。

「サイフとかなら最高だったのにな……………」

ペラペラと拾った手帳をめくって見る。

林童恵奈、地元の中学の三年生だそうだ。

「こんなもん持っても仕方無いよな……」

投げ捨てる素振りだけして、そのままポケットの中に入れる。

「まあ、何かの縁だろうしな。しょうがないよな」

ベンチから立ち上がると、先程の林童恵奈のあとを追う。

こんな時間に歩いている中学生なんて、すぐに見つける事が出来る。

案の定、歩いて行った方へ少し駆けて行くと、すぐに見つける事が出来た。

「おい、そのキミッ!」

しかし、彼女の反応は無く、歩む足を止める気配は無い。

「はあ。」

溜息を吐き出し、頭を掻くと彼女の前に仁王立で立ち塞がってみる。  
しかし、それも無視して先へと進む。

？「おい、ちょっとまって」

勢いで彼女の腕を引っ張る。

しかし、彼女は、それすらも無視して先へと進もうとする。

「だから、俺の話を聞けって」

そこで、ようやく彼女は反応を見せた。

「なに？ そんな風に引つ張られたら、先に進めないんだけど」

「いや、だから、話を聞けつて、お前、林童だろ？」

「だったら何？ 追っかけ？ ストーカー？ 異常性癖者？」

初対面の奴にそこまで言われる筋合いは無いと、その場で、とつと帰っても良かったが、それだと、ここまで来た意味がなくなる。

俺は、ポケットから、彼女の生徒手帳を取り出し、差し出す。

「ほら、落とし物、一応大事なもんだろ？」

それを確認すると、彼女は、差し出した手帳を、奪うように取る。

「……、…見た？」

へ？

「中見たかって聞いてんのッ？」

まあ、見たって言えばみたが、てか、なんで、そんなに険しい表情なんだ。緊急事態発生。

回答しだいじゃバッドエンドまっしぐらだな。

俺は、回答を考える。

見ました、と丁重に謝る。

手帳を放置して逃げる。

ななめ四十五度から手刀をかまし、記憶を消す。



いやいや、最後のは無しだな。

真ん中のもただのチキンだな。

となりや、やっぱし、謝るしかないか。

「あ、あー……、見ちまったんだ、悪い」

手を上げて、頭を下げる。

彼女は、一瞬鋭い眼光を向けたが、すぐに溜息を吐き、軽く手を振った。

「……、一応礼は言っておくよ」

「うんで、なんにも、思わないんだ？」

「なにがだよ？」

「こんな時間に、中学生が歩いてる事にだよお」

林童は、口到人差し指を当てながら、上目遣いに俺を見る。

「あー、俺そついう趣味無いから」

「そつじゃなくてッ！　なんで中学生が、こんな時間にぶらぶらしてるのぉーとかッ」

「あー、俺も似たような人間だしさ、他人の事を、とやかく言う権利なんてないだろ？」

言つと、林童はむすつと顔を曇らせた。

その後は、適当な話しをしていた。

こんな、特に意味のない

会話は、久しぶりだ。

人と会話をする機会なんてなかったからな。

実際のところ、林童に、興味が湧いて来た。

多分、彼女も訳有りなんだろう、俺に俺なりの理由があるように、こいつにも、何かしらの理由があるあるんだよな。

そう思うと、無性にこいつの事が気になってしまう。

あくまで、年配者としての心配だが。

そんな事を、心の中でつぶやいていると、俺は、無意識のうちに、林童の頭を、撫でていた。

しかし、林童は、何も言わない。歩みの足を休める気はないらしい。

周りからは、若いカップルにでも見られているんだろうか。

「てか、この手は何？」

「いや、特にこれと言って意味はないんだが、なんとなくかな……」

林童は、ふーんと言うと、また、前を向く。

どうやら、まんざらでもない様子だ。

「やばっ」

突然、林童が声を上げた。

目線の先には、警官が一人たっていた。

マジかよ。見つかったら、補導だよな。

俺は、まだ逃げ道はいくらでもある。義務教育を終えている、十七歳は、昼間に歩いていたとしても、二十歳以下にふさわしく無いものを、携帯所持していない限りは、大抵は職質だけで済むだろうさ。

ただ、俺の隣りのこいつは違う。

一応、義務教育である、中学生なんだ。

見つければ、親への連絡は免れないだろう。

まあ、もつとも、見つければの話であり、見つからなければどうと言う事はないのだが。

……。

なんて、思った矢先に、林童は、一目山に駆け出しやがった。

そんなもん、見つけてくださいと言っているようなもんだ。

当然、自分の姿を見るや駆け出す、少女を警官が見逃すハズもなく。一瞬の間に、少女を追う警官の図が出来上がった。

俺の横を、すみません、通りまーす。

とか言つて、駆け抜けて行く、警官を俺はただ、見送ることしかできなかった。

林童は、警官に追われ、走り去った。

「はあー、大丈夫か、あいつ？」

心配だが、俺が行っても、なんの役にもたたないだろう。

だから、俺は、ただ、ここで、あいつを待つことしかできなかった。  
返って来る保障なんてないのに。

萩野コウジ編 序章1（後書き）

力及ばずの汚い文字配列や、変な言い回しが、多いかと思いますが、今後、読んでくれたら幸いです。

## 序章 2（前書き）

文字量少ないかもです。  
先に謝ります。

## 序章 2

しばらく、林童が戻って来るかも、などと言う期待をして待っていたが、結局、あいつは、戻っては来なかった。

「まあ、しょうがないわな」

さつき、時計を見たら、既に四時を回っていた。

もう、太陽は地平線の少し上の辺りで、月とのバトンタッチが、秒読み段階である事を告げている。

鱗雲が、夕日に照らされ、時折、北風が吹き付け、先程に比べ、えらく寒くなったような気がする。

この時期は、日が落ちると、一気に寒くなる。早いうちに、寢床を確定させた方がよさそうだな。

なんて、思いながら、街路樹のある歩道をせつせと歩き始める。

「よう、萩野、こんな所で合うなんて思わなかったよ」

「誰だ？」

目の前には、陽気そうな人間がたっている。

正直、こいつは俺の一番の友人だ。俺が、今の生活をしているのも、半ばこいつの影響もある。

俺の目の前で、にこやかな笑みを作るこいつは、俺が、通っていた高校の同級生だった。

いつも、二人で行動していたのに、こいつは、家庭の事情で、学校を辞めてしまった。多分、その時だろう、俺の高校生活が、かったるいものになったのは……。

「またまたあ、僕だよ、浅川だよ」

「いや、知ってるよ」

「分かってんなら、いちいち聞くなよ、人がせつかく偶然の再開をよろこんでるって時にッ？」

うがーと、騒ぐ浅川を見て思い出す。

そうだった、こんな他愛のない会話。こいつの、こう言う反応を見るのが楽しかったんだ。

「聞いているのかよッ？」

「ああ。ところで、今は何やってんだ？」

こいつが、学校を辞めたのは春先だった。突然の事だった。

本当に、突然の事だったんだ。

前日まで、いつもと何にも変わらなかった。

本当に、いつも通りだった。

呑気な話しをして、また明日と言って別れた。

しかし、次の日、浅川は学校に来なかった。

「一応、仕事しながらボチボチってかな、今は、アパート借りて、



なんとかやってるよ。 お前の方こそ、学校どうよ、しっかりやってるか？」

「あ…、あー、まあまあ…かな」

適当に誤魔化しておく、取り合えず、今は、近況を話している間ではない。

寢床を確保しなければならないんだ。

「まあまあって、…まあ、良いけどさ、それより、この後、なんか予定ある？ 暇だったら、ちよつと、遊んでこうぜ」

「全然暇だ」

「オツケー、じゃあ決まりな、どこ行く？ ゲーセン？ カラオケ？ それとも、飯いくか？」

「…そんな金はない」

「冗談だつて、家この辺なんだよ、寄つてかないか」

「もち却下、怖すぎんぜ」

「ちげーよ、こんなところじゃ長話も出来ないだろ？」

まあ、それもそうだな。

日は落ちて、辺りは紫に染まっている。

冷たい風も吹き付け、どこでも良いから風のこない場所に行きたい気分になる。

「わかった、うんじゃ行くか」

「それじゃ、ついて来てよ」

浅川は、陽気に歩き出す。

先程、林童が走り去った場所を越えると、ボロボロの安アパートが見える。

「これなのか？」

「すごいボロっしょ、でもまあ、住んでみれば、風呂もあるし、困ることはほとんどないんだよね」

かかかつと笑いながら、浅川は、ボロアパートの階段を登って行く。俺は、その後に続く。

「おわッ？」

突然、浅川が飛ぶ。

どうやら、何かがタックルを決めたらしい。

そのまま、地上3メートルの位置から、落ちて行った。

「成仏しろよ」

合掌を作り、黙祷しておく。

しかし、数秒も経たないうちに、けたたましい足音を撒き散らしながら、浅川は、飛び立った位置へと舞い戻った。

「何だつてんだよッ？　少し間違ったら、死んでもおかしくなかったよ？」

俺に対してじゃない、先程華麗なタックルを決めた者へ対する言葉だ。

俺は、その言葉の先に視線をおくる。そこには、見覚えのある姿があった。

「林童」

昼間の少女がそこには立っていた。

## 序章 2（後書き）

感想とか、よかったら御願ひします。  
それを見ると、やる気になります。

### 序章 3

林童は、息を荒げ、目を腫らしてそこに立っていた。

その様子を見るだけで、あの子の事が容易に想像できる。

浅川は、林童に激しく文句を垂れているが、林童本人はそれどころではない様子だった。

「後は俺に任せろ、お前は先に家にいろ」

「さすが荻野、ガツーンと言ってやってくれよな」

「おう」

と気前良く返事をしてやると、機嫌をよくしたようで、鼻歌混じりに部屋へと入って行った。

「何かあったのか…、まあ、言わなくても大体わかるが」

林童の気の落ちようは尋常ではない様子で、放って置いたら、ここから飛び降りてもおかしくない程に追い詰められている。

暫くの沈黙を置いて、俺は、手招きをする。

「ちょっと寄ってかないか、安心しろ、俺の親友だ、大抵の事は気にしない質だから、大丈夫だ」

林童は、こくつと一回頷くと、俺の後について来た。

取り合えず、一応許可はある訳だから、勝手に上がらせてもらおう。入ると、テレビと、コタツが置いてある。

取り合えず、テレビをつけ、コタツに入る事にする。

「ほら、お前もそっち座れよ」

そう言つと、突つ立ったまま、ぼうと、部屋を見渡していた林童は、静かに座つた。

ガラリと、ふすまが開かれ、浅川が登場した。

「暇つぶしに、ゲームやろうぜえって、なんでこいつまでいるんだよッ？」

先程、自分を地上3メートルからダイブさせた張本人がコタツに入つてくつろいでいるのを見るや、浅川は林童を指差して叫ぶ。

「いや、別にいいんじゃないか？」

「よくねえよ、大体こいつ、さっき僕を突き落とした張本人なんですよけどッ？」

それは聞き捨てられないと言つ表情で、林童は膨れっ面を見せる。

「あれは、事故ですよ、突き落としたなんて、人聴きの悪いこと言わないで欲しいです」

「そうだな。浅川、言い過ぎじゃないか？」

「なんで、そいつの肩ばつか持つんだよ、落ちたのは僕だぞッ！そして、ここは僕の家だ」

頭に血が上つた浅川がうがーと騒いでいるが、俺はそれを片目に捉えつつ、林童の様子を伺う。

さつきに比べれば大分落ち着いたようだが、それでもまだ表情に曇りが見える。

しかし、それでも平然を装っている。

「まあまあ、落ち着けて、こいつも反省してるんだから、いいじゃないか……な？」

俺は、そう言つて林童の方を向く、彼女は何かを考えているようで俯いていたが、浅川は、それを見て、猛省していると勝手に捉えて自分で勝手に納得した。

さて、こつからが本題だ。

お泊り交渉をしないといけない。

「ところで浅川、今日泊まってもいいか？」

直球勝負ッ？

「別に悪くはないけど、こいつはどうするのさ？」

林童を指差して言う。

「お前はどうしたいんだ？」

林童に聞いて見たが、林童は、未だに俯いたままだ。

「いや、反省してくれるのは良いけど、そこまで思い詰めなくても、確かに死ぬ思いだったけど、俺無事だし」

ずっと俯いたままの林童を心配してか、浅川は、なんとか、話しか

けているが、その努力は虚しくも、彼女の耳には全く入っているようにには見えない。

「お前が良いなら、こいつも泊めてやったらどうだ？ 訳有りっぽいし」

「いや、訳有りの人を泊めるのが一番厄介だと思っんですけどね」

「そりゃそうだが、一晩くらいいいんじゃないか？」

はぁーっと溜息を吐くと、浅川は、風呂を入れてくると言って、浴室へ向かって行った。

林童は、それを見送ると、こちらへ振り返り、少し安心したような表情で口を開いた。

「その、ありがとう…、詳しくは話せないけど、今は家に帰りたくないんだよ」

そんな事は、見ればわかるさ。

「言つたろ。俺も訳有りだ、大体わかるさ」

それを聞くと、そう、と呟いて、また顔を伏せた。

と、ほぼ同時に、浴室から軽快な水音が聞こえ、それとほぼ同時に、浅川が戻ってきた。

「おまたー」

「おう、うんじゃ飯よろしく」

「わかった、ちょっと待ってる…って、久しぶりに合った友人の家に上がり込んでるには、随分な態度ですね」

「まあ、こんなもんだろ？」

「何がこんなもんなのさッ？ まあ、良いけどさ…、知ってるとは



思うけど、僕は料理出来ないよ?」

自炊しろよ。

と、つい突っ込みを入れなくなる。

しかし、困った、今日の晩飯のアテが無くなった。

ちらっと、林童を見る、弱冠の中学生家出少女。儚い期待は潰えた。

「出前でも頼んでくれ」

「本当、図々しいっすね、あんたッ!」

「俺ピザで良いや」

「…、じゃあ、私は握りずしで」

「ああー、もう、そんな金ねえよ」

だろうな、てか自炊しやがれってんだ。

「じゃあ、飯どうすんだよ、てか、食材とか置いてないのか?」

「一応、米が、そこに、簡単な食材なら冷蔵庫に入ってる」

「問題は、作り手だけか」

「だな」

ギロリと、林童を見る。

視線に気付いた林童は、包丁で何かを切るようなマネをして、なんか、アピールしているが、そこはあえてスルーしておく。

お決まりの、奇跡的な不味さの料理いーとか出てきたら、折角九死に一生ものの奇跡的な生還を果たした浅川や、並の人間な俺は、確実に三途の川の向こう側へ押しやられてしまう事だろう。

さて、どうしたものか。

まあ、この際どうでも良い、腹が膨れればそれで良い。

林童は、勝手に台所へ歩いて行っだし、浅川は、食糧調達にコンビニへ走った。

俺は、その場で横になり、何気なくテレビを眺める事にした。

???

## 序章 4

台所から、調理をする音と、うまそうな匂いが漂ってくる。

浅川は、コンビ二へ行くと出て行ってから、もう、数十分は経っているが、未だに帰らない。

そうこうしている間に、林童が料理を運んで来た。

「できましたよ、食材が全然なかったんで、チャーハンとみそ汁だけですけど」

全然オーケーだ、今なら豚さんのご飯でも涙を流しながらうまいうまいと、絶賛して食べれるだろうぜ。

ちらと、林童が持って来たチャーハンとみそ汁を眺めて見る。

「普通にうまそうだな」

「だから、料理出来ますよアピールしてたじゃないですかあ」

まあ、確かにアピールはしていたが、家出少女がなあ、って思うだけの普通。

「あたし、ちっちゃい頃に、母親亡くしちゃって、ずーつと家のご飯はあたしが作ってたんだ、レポートリーも結構あるんだよ」

もちっと早く言ってくれれば。

浅川がコンビ二に走る事も無かったらうに。

「まあ、取り合えず食べてくださいな、きつと涙流して悶絶しますよ」

「いや、悶絶って…、心配になって来た、本当に大丈夫なんだろうな」

「例えですよ、例え、美味し過ぎて悶絶したように歓喜する仕草を連想してくださいよ」

まあ、匂い的にも食えない者でない事は何となくわかるが。  
まあ、いいか。

意を決して、チャーハンを口の中に放り込む。

なんだ、この味は、絶妙な塩加減、存在を誇示しすぎないベーコンに、全体のバランスを整えてくれるタマネギ。

そして、ふんわりと全体を包み込み後味をやんわりと、それでいてしっかりと残してくれる。

「最高だツ？ こんなにうまいチャーハンを食った事がない、お前、実は三ツ星コックかなんかだろ」

「でしょー、とってもおいしいでしょ、もっと褒めて、褒めてツ！  
もっとツ？」

確かに、言うだけの事はある、そんじょそこらの中華店のチャーハンが食えなくなるくらいうまい。

浅川よ、お前の苦労は全くを持ってしての無駄だったって事だな。

もう一口。

うめえー、うま過ぎんぜ、最高だツ？

と、林童的に言う、うまさの悶絶をしている時に、うまい具合に浅

川が帰宅する。

「カップ麺でよかったろ？ 参ったよ、近くのコンビニが閉店してて、ちょっと歩いたところのコンビニに行ったら、食い物が全品売り切れ、更に行ったところにあるコンビニは、カップ麺以外は全滅、って訳で……って、萩野ツ？ 大丈夫かツ？」

五月蠅いな、てか、どんだけついてないんだよ、コンビニが売り切れて、聞いた事ないぞ。

「わるい、俺が遅いばかりに、今、カップにお湯淹れるからな、すぐに出来る、たった三分だ、三分待つてろよあーッ？」

叫びながら、走り去る浅川の目はマジだった。

ま、いつか。

「あいつが戻ってくるまでの間に全部喰っちゃまおうぜ」

本当は味わって食べたいところだが、この味を浅川に味合わせるのは勿体ない、あいつは百八十円のカップ麺を喰ってればいいんだ。

ハグハグと、がつついていっていると、林童も、状況を察したのか自分の分を大急ぎで食べ始める。

みそ汁もきつとあいつに食わせるには勿体ない味なんだろうな。食べ終えたチャーハンの皿を遠くに置き、目標を目の前のみそ汁に向ける。

この間、一分三十秒、残り半分。ずずず、とみそ汁を一気にかき込む、みそ汁も最高の味だったが、それに歓喜している余裕は無い。

「鍋ごと貰うぜッ？」

火にかかっている鍋を持ち上げると、一気にかき込む。  
丁度三分…。

「三分たったぞ、今日のカップ麺は最高の味だと思っぞって、萩野どうした？ 返事をしろッ？ 萩野ッ？ 萩野オオオオオオッ？」

火にかかった鍋なんて、丸飲みするんじゃ無かった。

と、喉を抑えて悶絶しながら、意識が遠のいて行く俺は後悔していた。

## 序章 5

熱湯を注ぎ三分経ったカップ麺を両手に持った浅川が、慌てて戻って来る。

「荻野ッ？ 大丈夫か、おい、返事をしろ」

喉が焼ける。やばい、だれか水を…、冷たい物を…はやく。

「毒を食らわば皿までってか、本当に鍋ごと食うやつなんか初めてみたよ……、って、感心してる場合じゃ無いな、取り合えず、これを喰って毒を抜くんだッ？」

いや、気持ちはあるがたいが、今、その熱湯の入ったカップ麺を食うのは非常に芳しく無い状況なんだ。おい、よせ口を開くな、なんだその目は、眼が怖いぞ、やめろ……やめてくれえッ？

俺の口に入って来た熱々熱湯スープは、喋る事すらままならない俺の喉をこれでもかという位に焼いて胃へと落ちて行っただ。限界だ。

「どうだ？ ちょっとは良くなったか？」

「……………」

無言で睨んで見る。

「おい、荻野？」

お前も同じ目に合わせてやるさ。

「…林童、こいつを抑えつけろ」

言つのと同時に、林童は、浅川を捕まえた。

「さ、こつからが本番……、こつからが公開処刑だ」  
「ヒイツ？」

小さく悲鳴をあげる浅川の目は、マジで怯えている。  
口をこじ開けると口の中があらわになる。

片手に持ったカップ麺をちらと見ると、にんまりと口がほころぶ。

さてつと。

一気に、カップ麺を注いでやる。  
声にならない声をあげて苦しむ浅川は、目から涙を流している。

お前が先にやった事だからな、恨むなよ。

カップの中身が空になる頃には、浅川はその場にうずくまっていた。

「よし、もう風呂も準備出来ただろうし、林童、先に入ってこいよ」  
「いいんですか？」

「ああ、お前と今のこいつを二人つきりにすると、何をするかわからないからな」

そう言つて、その場にのびている浅川を指差して言つと、林童は頷き浴室へと向かつて行った。

ノックアウトされた浅川が、部屋で寝ている。



「まったく。おい、そのまま寝ちまうぞ、起きろッ！」

ぐったりとしている浅川は、手をだらりと上げて、フラフラとふつて見せる。

浴室からシャワーの音が聞こえる。

どうやら、林童が風呂に入ったみたいだな。

「おおお、荻野、あいつ、風呂入ってるのかッ!？」

なんだよ、そんなに慌てて。

「そうだよ、なんか問題あるのか？」

「大ツツツツツ問題だッ？ 仮に未成熟と言えど、女だぞ、それを自宅の風呂に入れるなんて。うおーッ？ 興奮してキタァッ？」

鼻息を荒げ、部屋を汽車歩きで歩き回るこのバカは、まだ残っていたカップ麺の汁を撒き散らし、その場に倒れこんだ。

「服汚れた、風呂入って来る」

…ちよつとまで。

「どこに行く気だどこへッ!？」

「風呂だよ……」

浴室へと歩いて行つた。

「勝手にしろ……」

数分後、鼓膜が破れそうな甲高い悲鳴の後に、凄まじい悲鳴が聞こえ、それと同時に、部屋の破壊される音を聞いた。

轟音とは、この事を言うのだろつなと、一人感心してみた。

窓の外には裸で宙を舞う浅川が、涙を流しながらこっちを眺めていた。

数分後、ずたボロになった浅川は俺の前でむすつとテレビを見ていた。

「自業自得だ」と、ツツコミを入れてみたが、当人えらくご機嫌斜めの様相で、軽く無視を決め込んでくれた。

まったく。

溜息をついて、無言の間をどうにか詰めようと考えていると、林童が現れた。

浅川の顔が一瞬引きつったような気がしたが、次の瞬間には、またぶすつとした、不機嫌面になっていたので、確認のしようがない。

「上がりましたあ。えーと…荻野さん？ 入ってくださいよ」

家主は僕だぞお、とかまたツツコムかと思つた浅川は、無関心を装って、テレビを眺めている。

こっちを意識し過ぎて、明らかに視線がおかしな方を向いてる事は言うまでもない。

「ああ、わかつた…」

とだけ言って、俺は浴室に向かう。

明日は、どうするか。

林童が、俺の予想どおりに家出少女だったとして、学校にも行っていなかったとしたら、明日は一緒に行動する事になるかもしれないな……。

浅川は、明日は仕事があるのだろうか、あったとしたら、長居はマズイだろうな。

なんて事を考えながら、てばやく風呂をすませる。

戻ると、林童はもう寝入っているようで、浅川は未だにぶすつとテレビを眺めていた。

いや、見入っていた。

多分隣で林童が寝ている事にも気づいていないだろう。

「浅川、風呂空いたぞ」

「ああ」

一言だけ返してまたテレビに見入る。

俺は、コタツに入ると、そのまま目を閉じる。

今日は色々あったなど、思い出しているうちに、深い眠りについた。

## 序章 6

朝、陽気な小鳥のさえずりで目が覚める。

どうして、目覚まし時計や、親に起こされたりしたら、あんなに目覚めが悪いのに、自然と起きた時ってどうしてこう目覚めが良いのだろうか。

なんて、頭を掻きながら考えていると。

急いだ様相の浅川がドタバタと現れた。

「なんだってんだ、朝から騒々しい。こっちは休日だぞ?」

「居候にそんな事言われる筋合いねーよ。てか、お前と林童は万年休日だろうが!」

着替えを済ませ、昨日ついでに買って来たであろうコンビニのパンを片手に律儀にもツツコミを入れてくれる。

こいつは、どうかのお笑いの養成所にも行った方がいいんじゃないかと思う。

「お弁当、一応作っておきましたよ」

ペタペタと台所から林童が現れた。

「おっ、サンキュー…って、食える物だろうな?」

「それはもう、あたし、料理だけは自信があるんですよ」

一応、弁当の匂いだけ嗅いで、カバンに詰め込むと、気持ちはずれしかったと言うような表情で、外へと走り出した。

外からは、「鍵はそこに置いてあるからなあ」と言う声が響いて

来た。

ちらと見ると、テーブルの上に、ひらがなで”すぺあきい”と書かれた鍵が置いてあった。一応、鍵は置いて行ってくれたようだ。

取り合えず、鍵をポケットの中に突っ込むと、朝飯を探りに台所に向かった。

台所には、すでに朝飯の準備が整っている。

「おはよー」

「おう、おはよう」

林童は、椅子に座りすでに食事中だ。

はてさて、今日はどうするかな。

取り合えず俺は、目の前にある激ウマチャーハンを頬張りながら考える。

このままずっと、浅川の家に入り込んでる訳にはいかない。

行く艶なんてない。でもこれまでだって一人で何日かは過ごしてこれたんだ。

「まあ、なんとかなるかな」

「何がですか？」

「いや、何でもない、それよりお前は今日はどうするんだ？」

「今日も街を歩きますよ」

そうか、こいつもこいつで何かしらの理由と目標があるんだろう。俺は、ポケットの中にある鍵を机の上におく。

「これ持つとけよ、なんかあったらいつでもここに来れるようにさ」  
「でも、それだと荻野さんが困りますよ、あたしはいいですよ。これまでだって、なんとかやってたんですし」

それは、俺も同じだ。

「まあ、いいわ。取り合えず、俺はもう行くから、鍵掛けて置いてくれな」

そう言つと、俺は街へ出て行く。

林童は、ぼうつと俺を眺めているだけだった。

暇だ。

洒落にならん、取り合えず俺は、いつも通りに街路樹の脇のベンチに横になる。

てか、何やってんだろつな、退屈な日常が嫌で飛び出したはずが、今の現状は前以上に退屈だ。

浅川と二人で大笑いして、周りのみんなも巻き込んで馬鹿騒ぎして……。そんな夢を見ていた。

遠くから聞こえて来る声で目が覚める。  
太陽はもう傾いている。  
結構寝てしまったようだ。

声の元を探つて、視線をばらまいて見たが、そこいらにそれらしい影は見当たらない。

まあ、気になるし行つて見る価値はあるかな。  
どうやら声は裏路地の方かららしい。

入つて見ると、かなり薄暗くきみが悪い、あんまり長居のしたくない場所だ、変なのに絡まれてもしたら事だしな。

「だから知らねえツてんだよツ？」

「大体よお、そんなところがあんなら、俺等こんなとこに居ないつての」

男の声だ、その後に、違いねえと数人の笑い声が続く。

遠くてよく見えないが、絡まれてるのは女のようなだ。

絡まれてるのかどうかはさて置いて、取り合えず言つて見るか。

「何かあつたのか？」

さり気なく輪に入ろうとしたが、やっぱり無理があつたようで、男の視線がこちらを睨みつける。

「なんだお前？」

「いやいや、ちょっと声が聞こえてさ、なんか興味のそそられるような話だったもんで」

手をフラフラと振りながら話を合わせる。

「ああー。おい、こいつに聞いてみる」

男がそう言っと、女は俺の方を向くところ言っただ。

「貴方はへブンを知っていますか？」

見ると、女は林童だった。

へブン？ そんなもん知るかよ。

場に暫くの沈黙が流た。



## 序章 6（後書き）

この部で、序章は終了です。

次は、第一章に移ります。  
サブタイトルは「ヘブン」

## 第一章 ヘブン

「それで、ヘブンって？」

さっきの男共が呆然としているスキに、とつといつものベンチに戻ると、林童を前に問いかけた。

言いにくそうに、もじもじとしながら、林童は言う。

「噂で聞いたんです。行き場の無い人たちが集まる楽園の噂ですよ」  
聞いた事があるような気がする。どうしようもない連中の溜まり場の噂だ。

もつとも、ただの噂として、まったく気にしても居なかったが……。そうか、ヘブンを探すつても一理あるな。

「特に気にも止めなかったが、ヘブンか……。確かに面白そうだな」  
それを聞いた瞬間に、林童の表情がぱあーと明るくなる。

「でも、ヘブンの情報はこれっぽっちも入って来ないし、もう諦めかなあって……」

「……、そうか、頑張つて調べたお前が言うんだから、確かなんだろうな」

「もう遅いし、浅川には悪いが、今日も泊めてもらおう」

林童は、コクツと頷くと、後をついて来る。

ヘブンか……。本当に見つけれたら面白いだろうな。

ドスッ

何かがぶつかった。

それは、軽くぶつかった衝撃で倒れた。

「すみません！」

「……………」

目の前には無言の少女が座り込んでいる。彼女はまったく反応を示してはくれないが、こちらの存在に気づいてないとか、そう言うのとは違うようだ。

「……………なに？」

なに？　じゃないだろう、ぶつかったから謝る、それすなわち自然の節理。

「いや、悪かった、前をしっかりと見てなかった」

「……………怪我はない」

「そうか、でも悪かった。その制服だといつとおんなじ学校か」

「……………そう？」

いや聞かれても…、まいつか。

ここにいっても仕方がない。

俺は、もう一度贖罪の意を込めて、片手を上げるとその場を後にした。

彼女の名札には、青川柚と書いてあった。

「何だったんだ…、知ってるやつか？」

「知らないよ。多分、年下だねえ」

まあ、気にしても仕方がないか。

ヘブン……、か。

「どれくらい調べたんだ？」

「ヘブンの事？」

「それ以外になんかあるか？」

「……、無いねえ。……、調べ始めたのが、先月の頭からだから、丸々一月以上は調べて回ってるよ」

「収穫は？」

「ゼロ、誰も知らなかった」

一月で……。聞いた人数は三桁を軽く超えるだろう。

本当にあるのだろうか……。

急に胡散臭さが増した。

「本当にあるのかねえ」

あるのかどうか怪しいヘブン。それをこいつは、大真面目に探している。

こいつには、目標があるんだな。

気付くと、俺は林童の頭を撫でていた。

「この手は何？」

「気にするな……、おまじないだ」

もし、本当にヘブンなんてもんが実際にあったなら、俺でも見つけられるのだろうか、夢ってやつを。

その後、帰宅するまでの時間を費って聞き込んで見たが、まったく収穫はなかった。

そして、今日も浅川の家で夜を明した。

## 第一章 ヘブン 2

ヘブン……か……。

「浅川、起きてるか？」

電気は消えているが、たぶん起きているだろう。

「ヘブンって知ってるか？」

「……、なんだよ……。明日も仕事なんだからさ……。もう寝るよ」

そう言ってもぞっと、寝返りをうつと、あっという間に寝息をたて始めた。

今日は、これ以上の情報を集める事は出来そうにない。

「せめて話くらい聞いてくれてもいいものを」

なんて呟いても、浅川はスヤスヤと寝入っている。

今ある情報は、ヘブンと言う、若い世代の人間にとつての、樂園のような場所、組織があるって事くらいで、詳しい事はまだ何にもわからない。

たった、それだけの情報だ、都市伝説のようなものなのかもしれない。でも、それでも俺は、ヘブンを信じてみようと思う。

樂園と言うくらいだから、きっとものすごい物があるに違いない。そう考えただけでも、高鳴る胸の鼓動が、更に激しくせわしくなる。

モンモンと、ヘブンへの妄想が絶好調に達したあたりで、一筋の光が部屋に舞い込んだ。

「朝日ッ？ ……、だとッ？」

時計に目をやると、6時をとくに廻っていた。

「あれえ、今日は早いんだねえ。 朝御飯食べる？」

いや、俺にとっては夜食的な気分なんだが。 って、違う違う、これはまずい、一大事だ、今日はヘブンについての本格的な聞き込みをしようと思っていたのに。

「何時だ？」

「はい？」

「何時に出かけるようにするんだ？」

「いやー、まあ、お昼までには出て出かせたいと思うけど……。それで、朝御飯は？」

昼か…、現刻0630時頃、起床予定時刻1100時に設定。  
最大睡眠時間、三時間三十分。睡眠後の推定体力、及び脳の疲労度。  
身体、推定68%まで回復可能。脳、推定46%まで回復可能。  
今考えれる最大睡眠時間での、推定活動時間、およそ5時間。

何を考えてるんだ、俺は。

まあいい。とりあえず寝よう。

無言のまま床に就こうとすると、突然に後方からの攻撃を受けた。  
被弾位置は、肩胛骨……。だから、俺は何を考えてるんだろうか。  
多分、疲れて脳がしつかりと働いていないんだろう。

ボヤける視界には、何やら文句を垂れている林童の姿が写っていた。  
悪いな林童。  
もう限界だ。寝かせてもらうよ。朝飯はまた今度いただくさ……。

「……、起きろー、昼だよー」

……、眠い。  
もぞつと、もう一度布団をかぶり直し、睡眠に入る。

どれ程の時間がたったんだろうか。  
外を見てみると、辺りは紅に染まっていた。

「時間は……」

時計は、三時を廻った辺りを指している。

やつちまつたな。

周りを見渡したが、林童の姿が見えない。

「先に行ったのか……？」

行ってしまったとしても不思議は無い、予定は昼前だったんだからな。



探すか？ …… いや、俺は俺で聞き込むさ。

テーブルの上に置いてある冷めたチャーハンを見つけ、それを一気に頬張ると、勢い良くドアを開いて、外へと駆け出した。

## 第一章 ヘブン3

と、勢い良く外へ出たのは良いが、誰に聞けばいいのかまったくわからないのだが。

あの赤毛か？ あの銀髪か？ それとも、あの緑髪か？？

……、だれに声をかけたものか。

キヨロキヨロと辺りを見渡すが、それらしい人は多くいるのだが、声をかけるタイミングとか、全く掴めないんだが。

どうしたものかな。

溜息をついて、ぼうつとしてみる。

人が右から左、左から右へと、忙しくまるで、流れがあつて、その流れに乗って生きているかのように闊歩している。

その流れに乗っていないのは、俺一人…、いや、もう一人いた。

目の前には、下を向きトボトボと歩く少女がこちらへ向かつて来ている。

その様子は、他の流れとは歪で、何処となく浮いてい見えた。

あれは、昨日の……。

「ようっ」

一応、一度だけだとしても、顔を合わせた奴がいてよかった。まずは、一人だな。

俺は、見つけると同時に声をかけてみる。

しかし、彼女はまるで聞こえていないかのように、無視を決め込んでくれる。

デジャブだ。

ああ、林童の時と同じか。

って事は、やっぱり、奴も何かあるのかもだな。

とりあえず、手をつかんでやる事にした。

「ッ？」

「おわッ？」

手を掴んだ瞬間に鼻先を鋭い何かが通り。ほぼ同時に、激しい衝撃が右後頭部を襲った。

一瞬視界がぼやけたが、なんとか踏み止まる。

いや、ギリギリ踏みとどまれる程度に抑えてくれたんだろう。

確実に急所を捉えたのに、若干外したんだ。

「なに？」

ポツリと、彼女はそう言った。

素っ気無い返答だ。

いや、まあ素っ気無いと言っても、素手にぶつ倒されているのだが。

「ちょっと、尋ねて見ただけだ。　なんだ、その、ちょっと聞いた事がさ」

「だから、なに？」

無機質な瞳が俺を覗く。

「……、ヘブンって聞いた事ない？」

「……、ヘブン？」

彼女は、首を傾げて見せた。

それから、何かを思い出すように、じーっと一点を見つめ、それから、何かを思い出したようで、ハッとあたりを見渡す。

「組織の事？」

「組織？」

そう呼ばれているのか？

「そう。組織。少なくとも私たちはそう呼んでる」

「私たち？ 他にも誰がいるのか？」

「ええ。大切な仲間が」

そう、指差す先には、赤毛や青髪など、独特な髪色を華やかに晒している男が数人立っていた。

「あんたらも、ヘブン……、いや、組織を探しているのか？」

につしつと、薄気味の悪い笑顔を浮かべる男共。  
多分それは、肯定を意味しているんだろう。

「あんたらも、訳有りなんだな」

「まあ、色々だね」

「俺も、いや、俺たちもそんな感じさ」

「たち？」

「ああ、もう一人いるんだ。昨日、一緒にいたろ？」

「ああ、あの」

「ところでさ、あんたらは、その……、組織、の事をどこまで知っているんだ？」

少女は俯く。

男共は、苦笑いを浮かべ、バツの悪そうに下を向く。

それだけで、充分だった。

「そつちも何にもなし……か」

コクツと、頷く彼女の目は、どことなく疲れているように見えた。

「まあ、焦っても仕方ないさ。ところで、あんたら、寢床はどうしてるんだ？」

「ああ、俺たちは、アジトを使っているんだ」

「アジト？」

「ああ、わりいな、アジトの事は内緒なんだわ」

少女は、男共の中にひそみ、代わりに赤毛の男が話す。

てか、こいつめっさ阿呆そうなんだが、大丈夫なのか？

浅川とどつちが上か比べてやりたいな。

なんて、頭の中でバカ頂上戦を繰り広げていると、少女が、男の間を割って出てくる。

「いい。許す。仲間は多い方がいい」  
「さっすが、ゆずっちだッ？ 大海のような心の広さッ。グッとくるぜッ？」

ゴスつと言つ生々しい音を立て、男はその場に倒れこんだ。

全く見えない拳が、頭部の急所を捉えたらしい。

俺もあの拳を食らっていたようだ。

おお、怖い。

「五月蠅い、黙れ」

言い捨てると、彼女は手を差し出した。

「わたしは、青川ユズ。よろしく」

「ああ、またなんかあったら頼らせてもらっさ。それで、アジトつて？」

「ええ、街のショッピングモール建設予定地って知ってる？ あそこ」

街のショッピングモール予定地って言えば、ここ数年、鉄骨だけ組んでそのまま放置されているあそこの事か。

「そこを寝ぐらに？」

「ええ、風通しが良すぎるのと、雨が振り込む事を除けば、快適なもの」

それって、居住性にかけるんじゃないのか、なんて思っても口には出さないが。

そうやって過ごしてる奴らもいるんだなと、少し世界が広がった気

が  
し  
た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5779m/>

---

夢の楽園SS

2010年10月10日22時35分発行